

文章力指導の授業で気づいた乳幼児の生活（保育）の重要性

—— 乳幼児の生活（保育）で大切にすべきことを考える ——

佐藤 達全¹⁾

Importance of the Care of Infants and Young Children Derived from a Writing Skills Class:

What Should Be Valued in Their Lives

Tatsuzen Sato

Abstract

One of the classes that the author taught at junior college was “Japanese Expressions,” the goal of which was to acquire appropriate Japanese expression skills, namely conversation and writing skills. (The subject name has changed several times owing to curriculum revisions.) Childcare workers are required to have not only conversational skills but also writing skills, but most students are not aware of their writing skills. However, when students become children workers, they will be required to not only keep records of childcare but also write documents such as contact books and school newsletters to convey information accurately to third parties.

Therefore, to help students acquire a minimum level of writing ability by the time they graduate, students were asked to submit 400-character essays as weekly homework that were returned to them with feedback. The reasons for evaluating the essays were explained and guidance on how to write such essays provided during class. In addition, the students were asked to correct any inappropriate expressions and resubmit their essays after receiving feedback. Although it took a considerable amount of time to read all the essays, desirable results were achieved through this method. However, students’ writing skills have exhibited a declining trend over the years, and there has recently been an increase in the number of sentences that made the author wonder, “What did they learn in elementary and junior high school?”

Further, while reading the essays, the author realized that there were more important and serious problems than simply the obvious mistakes of “simply not being able to write.” The reason for this was the fact that the author became the director of a children’s center (originally opened as a nursery school) that his father founded in 1954 and had many opportunities to see children’s activities at the nursery school. This study analyzes the essence of the problem and explores examples of children’s activities.

Key words: Junior college students’ writing skills and learning attitudes, childhood play, importance of experience, curiosity and motivation to learn, continuity of development

キーワード：短大生の文章力と学習態度，子ども時代の遊び，体験の重要性，好奇心と学習意欲，発達の連続性

1) 育英短期大学名誉教授

1. はじめに（考察の方向性）

以前から「国語はすべての基本」と言われてきた。どのような分野の学習をするにも、文章を読んで内容を理解したり、自分の考えを文章で表現したりする力が求められる。ところが、近年は読書離れが進んだことに伴い、読解力や文章表現力の低下が問題視されるようになった。そして、このことは児童や生徒だけでなく、短期大学や四年制大学の学生にも当てはまる非常に深刻な問題とされているのである。

筆者は1976年4月から2022年3月まで、短期大学の教員として勤務した。最初の4年間は家政科の短期大学で「文学」と「食の倫理」を担当し、育英短期大学保育学科には1980年から勤務したが、前任校を含めて1990年代の半ば頃までは学生の文章力に問題があると感じることはなかったと記憶している。育英短期大学では「実習指導」や「道徳教育（保育者としてのあり方の講義）」を担当したが、両方の授業とも授業内容の定着度と出席を確認することを目的に毎回200字程度のレポートを提出してもらった。

90分の授業終了前の10分ほどで、授業に対する感想や学習内容の要点を簡潔な文章にまとめるのである。ところが、元号が平成に変わった10年頃から、「これが大学生の書いた文章なのか」と思わざるを得ない表現が増えてきた。

その後、「実習指導」に加えて「日本語の表現法」を担当することになったので、学生の文章力低下の原因解明と文章力を高めるための取り組みにも力を入れた。その方法や学生の文章表現の変化等については、これまでに『育英短期大学研究紀要』（以下『紀要』と略称）等で何度か報告をしたので第4章で簡単にふり返ってみるが、最近問題は一段と深刻化したと感じるようになった。その理由は、初めに「国語はすべての基本」と書いたように、文章力の低下をこのまま放置しておく保育者の注意力が低下して、子どもを保育す

る上での重大な問題（保育中の怪我や事故等）が発生しかねないと考えるからである（その一部は『紀要』40号で触れた）^{（註1）}。

こうした状況は絶対に避けなくてはならず、そのためには小学校や中学校・高等学校での学習に対する取り組み方の改善が必要なのは言うまでもないが、ここではそうした問題には触れないでおく。ただ、近年は高校卒業までに学習すべき内容が十分に身につけていない高等教育機関への進学者が非常に多くなっていることと関連して、短大生（四大生も含む）の学力だけでなく学習意欲の低下も深刻である^{（註2）}。

その一方で、人間形成の基礎作りは幼児期の大きな課題であり、学習意欲にも幼児期の環境が大きく影響していることが指摘されているように、短大生の文章力の低下や学習意欲の低下等を形づくる原点として、子ども時代の遊びや生活にも十分に目を向ける必要があるのではないだろうか。

そこで、本小論では、改めて学生の文章力低下の現状を取り上げながら、こども園の理事（理事長）として乳幼児の日常生活を目の当たりにしてきた15年ほどの間に考えたことも含めて、文章表現と関連づけて考えてみることにした。

2. 短大生の文章力低下の実態と背景

筆者が学生の文章力に問題があると感じるようになったのは、すでに述べたように今から25年ほど前のことで、そのきっかけになったのは次のできごとである。

①授業後に提出するレポートが正しい文章で書けない学生が多くなったこと。

それ以前の学生のレポートでは、文章の書き方に大きな問題は見られなかった。ときどき目についたのは「うっかりミス」と考えられるような誤字や当て字くらいであった。また、それまでは文章の書き始めを一マス空けたり、段落

(序論→本論→結論や起→承→転→結)に分けたりして、読みやすく書かれていたのだが、次第に段落に分けて書く学生が少なくなった。

②幼稚園や保育園の実習担当の先生から「実習日誌が書けない」「日誌を書くのに時間がかかりすぎて、ほかのことができない」「大学でもっと文章の書き方を指導してほしい」といった指摘や要望が多く寄せられるようになったこと。

しかも、問題なのは多くの学生が「自分の文章が間違っていることに気づいていない」ことと「文章が書けないと困ると思っていない」ことであった。そこでまず、小中学校時代の授業でどのような文章の書き方の指導を受けてきたかについて何度か調査をしたところ、8割ほどの学生が「指導を受けたことがある」とは答えていたが、それは個別の指導ではなかった。

そのことは「作文や夏休みの絵日記を提出したとき、先生から文章の間違いを指摘されたり直してもらったりしたことがあるか」という質問をしたところ、「してもらった」という答えが3割程度に激減していたことから明らかになった。さらに、中学・高校時代の授業でも「個別の指導がほとんどなかった」という回答が多かったことから、短大に入学するまでに十分な学習ができていないことが確認できたのである。

もちろん、国語の授業では正しい文章の書き方や間違った表現についての説明は行われたようだが、クラス全体に向けた説明を聞いても、なかなか「自分の文章が間違っている」と気づけないのかもしれない。さらに、小中高で学習している時には、正しい文章が書けなくても自分が困ることはほとんどなかったであろう。

しかし、保育者をめざした学習が始まるとそれではすまなくなる。それが、前掲の二つめの指摘につながっている。実習日誌に関しては、実習終了後に学生から、

①「一日の実習のふり返りを書いていると3時間から4時間くらいかかってしまい、毎日寝不足で大変でした」(筆者注：1日のふり返りを書く日誌のスペースはA4判の実習日誌の13行分でマス目はないものの、文字数は400字程度とそれほど多くならないはずである。だが、学生にとって文章をまとめることは大変だったのかもしれない)

②「どのようなことを書いたらよいかかわからなくてボールペンが動かず、悩んでしまいました」(筆者注：おそらく、園にいる時はなんとなく子どもと遊んでいるだけで、子どもの行動の意味や理由などを考えることもなかったのではないだろうか)

③「どうしたら文章が書けるようになりますか」という質問をする学生が多かった(筆者注：このような質問をされても、学生の心に、〈何が書きたいのか〉〈どうしてそのことが書きたいのか〉〈どんなことを学ぼうとして実習に取り組んでいるのか〉などといった問題意識や目的意識がなければ書けるはずはないのだが、これは残念ながらそのことに気づいていない学生の質問である)

といった〈相談〉が多く寄せられるようになってきた。

中には、なかなか文章が書けないで寝不足になって起床が遅れたため、出勤時間に遅れないようにと焦って自動車を運転していたところ、一時停止の標識を見落として反則切符を切られた(偶々、小学生の通学の安全を見守っていた警察官に見つかってしまったと話してくれた)という笑えない報告もあった。

実習は、普段の授業とは異なって保育現場で行われるので、実習の目的を達成するための準備だけでなく、受け入れ先の職員や園児と接する際の挨拶や言葉遣いや身だしなみ等にも十分に気をつけなくてはならない。そのほかにも、教室や園庭の

掃除や整理整頓といった基本的な事柄はもちろんのこと、ピアノやお絵かき・子どもの遊びや制作など、さまざまな保育技能や知識が必要になる。

ただ、ピアノやお絵かき等の専門的な分野の準備は、授業にあわせた継続的な予習や復習によって、ある程度の備えはできるが、言葉遣いや挨拶・掃除等に関しては、授業への取り組みとは別な日頃の生活習慣の点検が必要である。

筆者は学生が実習先から準備不足といった指摘を受けないよう、「実習指導」の授業で具体的な説明を心掛けていたので、一部の学生からは「そんなことは言われなくてもわかっています」といった態度を示されることもあった。しかし、大多数の学生の反応は「自分の日常的な行動や生活習慣を振り返るきっかけになった」というもので、指摘されて初めて気づくことが多かったのではないかと感じている。

参考までに、筆者が「道德教育」（保育者のあり方についての授業）で参考資料として学生に配付していた「本当に保育者になりたいと思う人への18章 一基礎的人間学・覚え書き」（『想林』第3集所収 1983年6月育英短期大学発行）の目次の一部を紹介しておこう^(註3)。

- 第3章 本当に子どもが好きですか（保育は子どもと遊ぶだけではない）
- 第4章 三つの顔で保育する（保育者自身の日常生活の重要性）
- 第6章 基本的な行動の習慣
- 第7章 礼儀の基本（社会人としての自覚）
- 第8章 生活のリズム（健康管理の重要性）
- 第9章 立ち居振る舞い（子どものお手本になるという意識の重要性）
- 第10章 服装について
- 第11章 約束を守る
- 第12章 視野を広げる（子どものさまざまな面の理解につながる）
- 第13章 あなたの食べ方はどうですか（子ども

のお手本として）

- 第14章 あなたの部屋はきれいですか（心を磨くことの重要性）
- 第15章 心ここにあらざれば（注意力の重要性について）
- 第16章 人間としての魅力（信頼される保育者になる）
- 第17章 子どもから学ぶ（子どもの心を理解するために）

この資料で学生に伝えようとしたのは、「子どもは周囲の大人の姿をお手本として成長していく」ので、保育者を目指す学生にとって重要なことは「自分の生き方が子どものお手本になれるかどうかを考えながら毎日の生活をしてほしい」ということであった。そのため、第4章「三つの顔で保育する」の中で、筆者はさらに具体的に次のように説明した。

私たちの行動は、テレビのチャンネルのように、すばやく完全に切りかえることはできません。特にその行動が、生活の基層部分に関わる場合においては、なおさらでしょう。ごはんの食べ方や歩き方、戸の開け方や会話のし方など、日頃の習慣が思わぬところで顔をのぞかせます。しかも、子どもたちはそうしたところほど、見逃さないものなのです。

私はいつも、学生に「三つの顔で保育しなさい」と話しています。それは

- (1) 正面の顔（自分が先生であることを意識している、勤務中の姿）
- (2) 横向きの顔（勤務場所を離れた、日常生活での姿）
- (3) うしろ姿（どんな生き方をしているかという心の状態）

の三つです。勤務時間中だけ、子どもたちの前で先生らしく行動しようとしても、それはできません。日頃の自分の行動様式が、知らず知らず

のうちに表に出てしまいます。ですから、家で過ごしたり、ショッピングしたりというプライベートな行動であっても、子どもに見られて恥ずかしくないようにしなくてはならないのです。

また、子どもやその保護者が、勤務を終えたあとのあなたの行動を見ることもあります。教室で、もっともらしいお話をしても、素顔、普段着のあなたの姿があまりにもそれとかけ離れていたのでは、子どもはびっくりしてしまいますし、保護者の信頼も失ってしまうでしょう。三つの顔の話から、そうしたことを考えてほしいのです。

乳幼児期の「教育」の原点は「知識を教える」ことではなく、「ヒトとして生きていくための土台づくり」である。それは、自分のまわりにあるものに対して「何だろう」という関心を持ち、「どうしてだろう」と掘りさげて考えることでもある。さらに「どうしたらよいだろう」と考えることによって、より一層考え方が深まったり取り組み方を工夫したりする注意力や集中力が養われていくはずである。

自分が興味を持ったことがスムーズに行えるように工夫をしたり、やり始めたことにねばり強く取り組んだりすることで、達成できたときの満足感が味わえる。そして、このような体験の積み重ねが、小学校入学以降の学習やさまざまな活動をする際に必要な「注意力」や「集中力」を育むことにつながっていく。さらには「話をしっかり聞く」などの基礎的な態度や人間性の形成にも影響するので、幼児期の保育にはきわめて重要な意味があるのではないだろうか^(註4)。

3. 文章力低下への対応と目標

本小論は学生の文章力の低下の原因と対応を模索することであったのだが、あえて幼児期の教育の原点などと言ったのには理由がある。それは文章力が十分に身につけていない学生の多くが、

「集中力」や「しっかり学習しよう」という意識が低いために授業中の説明をしっかりと聞いていないのではないかと考えたからである。

そこで、学生に集中力を身につけさせる試みとして「日本語の表現法」の授業で毎回提出する課題文の書き方について、以下に示すようないくつかのルールを決めて実行した。その理由は言うまでもなく、学生に「話をしっかり聞く習慣」や「注意力」を身につけてほしいと考えたからである。もちろん、それほど複雑なルールではない。

〈授業で行った課題文の提出方法について〉

課題は15回で、毎年の授業の初めに提示する。その内の7回の課題は自分の行動や考え方についてのテーマで、残りは保育や幼児教育に関連した社会的なテーマ、そして15回目のテーマは「課題文を書いて考えたことと今後の課題」という内容で、最終回は二つのテーマが含まれるため800字でまとめてもらう。提示されたテーマから外れた内容の文章を書いた場合は減点することも付け加えている。

そして、提出する際にはA4判400字の原稿用紙を使って「敬体文」で清書することを伝えている。敬体文で書く理由の一つは、連絡帳や園だよりで一般的に使用する書き方なので、在学中から慣れてほしいからである。

また、常体文よりも文末の書き方（です・ます）に注意が必要になるからである。実際に、敬体文で書かれた文章には「～してほしいです」や「楽しかったです」といった文法的に間違っただ「タラちゃん言葉」で書いてある場合が少なくない。その理由は、ほとんどの学生が「です」という助動詞に「活用する言葉」（助動詞や形容詞など）が接続できないことを認識していないからであろう。

さらに、現在は横書きの書類が多くなったが、縦書きのルール（例えば数字は基本的には漢数字で書く等）も覚えてほしいので、A4判原稿

用紙を横に使って文章は縦書きにしてもらおう。そして、原稿用紙の左上に2センチほどの○を書き、その中に何回目の課題文かがすぐわかるように算用数字を書き入れる。自分のクラスと学籍番号・氏名は原稿用紙のマスの右側余白に縦書きにする。

といったルールである。

その上で、こうしたルールを守っていない場合は減点することを伝えている。それは、説明を聞いて確実に実行するという意識を高めるため、「出せばいいだろう」という安易な考えは社会では通用しないことを身につけてほしいからである。決して学生をいじめているわけではないことも、初めに説明している。

私たちが何かの行動をするときには、「何のためにするのか」「どのようにしたらよいか」を常に意識する必要がある。それは、周囲の状況を考えずに行動していると、相手を不快な気持ちにさせたりトラブルが発生したりする恐れがあるためである。筆者は以前、実習指導を受け入れていただいた何人かの幼稚園や保育園の園長先生から、「挨拶ができませんね」というお叱りの電話をいただいたことがある。

挨拶や言葉づかいは基本中の基本なので、実習指導の授業でもくり返し注意を促していたが、残念ながら近年は言葉づかいや服装も含めて「気になる学生」が非常に多くなった。

そこで当該学生に状況を尋ねたところ、「私はちゃんとしていました」と憤慨していた。ただ、園長先生から実際に指摘があったので、詳しく事情を説明してもらったところ「実習園に出勤したとき、園長先生が保護者と話をしていたので、邪魔をしてはいけないと考えて園長先生の後ろを通りながら黙って頭を下げました。だから私は挨拶をしています」と相変わらず不満そうな表情を変えなかった。

彼女が言うとおりの、挨拶はしているので、私が

「たしかにあなたが挨拶をしたことは間違いないでしょうが、あなたが挨拶したことは園長先生に伝わったと思いますか」と続けて尋ねると、彼女はしばらく考えて「伝わっていません」と答えたのである。

そこで私は「あなたが挨拶をするのは何のためだと思えますか」と投げかけて、やりとりを打ち切った。対人関係における行動にはどれも意味があるので、「何のためにするのか」「どのようにしたらよいか」を考える必要がある。ただ、最近は「するように言われたからしている」という学生が増加しているように感じられてならない。これは、少子化の中で、幼児期から親や先生に「言ってもらおう」「してもらおう」ことが当たり前の環境で生活してきたためではないだろうか。

そこで、筆者は課題文の提出を通じて意識の改善を図ろうと試みたのである。いずれにしても「日本語の表現法」の授業を続ける中で、学生の文章力の低下と幼児期の生活には、相当な「因果関係がある」と考えたからだが、その一方で大学生になってから「注意力」や「集中力」を身につけることの困難さにも直面してきた。

さて、多くの学生にとって大変な「負担」になっていることの一つが文章力である。小中高校を通じて、文章を書くための基本的な「きまりごと」を身につけている学生には何ら問題はないのだが、そのような学生は急激に減少している。そして、当然のことだが、そのほとんどが「自分が間違った文章を書いている」という認識がないため、指導は非常に難しい。そのため、正しい文章の書き方を身につけるには、

- ①自分の文章の書き方が間違っていないかをきちんとチェックすること（自分でチェックするか、他人に指摘してもらうかの二方法）。
- ②間違いに気づいたら、正しい書き方を学んで書くこと。
- ③何度も正しい書き方を意識しながら、くり返

し書いて定着させること。

こうしたことを、根気強く何度も何度もくり返すことでしか、文章の正しい書き方を身につけることはできないのだが、子どもの頃から「大事に育てられ」て、困ったときには「すぐに助けてもらっていた」であろう最近の学生は、苦手なことを根気強く続けることに強い抵抗感があって、定着するまで努力しようとしなない傾向が見られる。

そのため、筆者は学生と根比べをするつもりで、提出された文章の「おかしな表現」の部分を残らずチェックして返却し、チェック部分を学生が訂正して再提出するという方法を続けてきたのである。なお、学生の文章力の実態について筆者が初めて取り上げたのは『紀要』第19号(2002年2月)の「保育科学生の文章表現力」である。そこには、当時の学生が書いた「おかしな」文章を「間違い別」にまとめて紹介してあるので、ここでは多くの学生の文章に見られる「おかしな書き方」の傾向だけを紹介しておこう。

- ①相当数の学生の文章に誤字や当て字が書かれている。
- ②主語と述語の関係が正しく対応していないため、文章の構成がおかしい。
- ③助詞の使い方がおかしいため、正しい日本語の文章になっていない。
- ④話し言葉と書き言葉が十分に区別できないため、話し言葉がときどき登場する。
- ⑤「見える」「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」など「最新のはやり言葉」のような表現がしばしば登場する。
- ⑥説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していない場合が少なくない。
- ⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っている。
- ⑧代名詞を用いて表現することがほとんどないので、同じものや人の名前などが何度も繰り返し書かれている。

⑨思い浮かぶままに文章を書くため、「ので」や「が」といった助詞を用いてダラダラと続ける学生も多い。その結果、一文が200字～300字になることも珍しくない。

⑩最近の学生の文章には「～ではないでしょうか」という推量表現がほとんど見られない。その理由は、子どもの頃から与えられることに慣れきって、想像力が乏しくなってしまったからではないだろうか。

⑪800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生も少なくない。

以下に示したのは2年生が書いた実習日誌の「1日のふり返り」と「実習期間全体のふり返り」である。「1日のふり返り」はA4の日誌13行分で、そこに示されているテーマはその日の反省と今後の課題となっているため、二つの段落に分けて書く内容にもまとまりがあつて読みやすい文章になることを「実習指導」の授業で説明しているのだが、ほとんどの学生が段落をつけずに書いている。

本日の実習の振り返りと今後の課題
全体で集まる時や説明をする時などの保育者の声掛け動向を意識して見るようにしました。子どもたちは、集中して遊んでいるため、時間中同様の声掛けに慣れていくと感じました。「おねえさん」や「ママ」の名前を言うこと、今呼ばれたのかよ、「次に何かをするのかよ」と気付けてくれると思っていました。また、説明をする時には具体的な例を挙げてあげると、子どもたちもイメージしやすく、製作に取り組みやすくなることなど感じたので、今後は、声掛けの時間中、「この声かけをする時間、製作をする時間などを子どもたちにも伝えることで、見通しを持って食事をしたり、活動をしたりすることができると感じました。手先も器用に慣れ、細かい製作物をイメージすることができたり、箸の上身に使えるように慣れたい。今後の発展の課題を学ぶことができています。遊びの中で遊ぶ仲間との会話が増え、「○○ちゃん」「△△ちゃん」と遊びながら話さなくなった。その中で、子どもたちは、いろいろな言葉が自分の話で聞いて受け止めることができたように思います。言葉の理解が深まることが必要だと感じました。

本日の実習の振り返りと今後の課題
0.1歳の子供たち、自分で出来ることが増えたり、出来ないことばかり「○○が出来ない」と子供たちの声で、保育者への問いかけに「出来たよ」と感じました。また、おねえさんの名前が声で呼ばれる前に、「おねえさん」と言うようにするのと比べて、食事の時、自分の口の大きさが分かるように、食べ物を噛めることができていくように感じました。また、自分で出来るように、他の子どもが出来るように教える機会を増やしてあげたいと感じました。「今、○○ちゃんが出来たよ。」(他にも同じ言葉がある)と声を掛けると、他の子どもも同じ言葉で答えるように感じました。そこで、「準備はいいですか」と声を掛けると、準備はいいと答えてくれるようになりました。おねえさんがおねえさんには、おねえさんに対して「おねえさん」と呼ぶことが出来るようになりました。それによって、双方の意思を聞いておねえさんにも分かるように声を掛けるとは難しいと感じました。おねえさんの一日の流れを理解することによって、発展の課題も知ることが出来たので、おねえさんとのコミュニケーションを取っていくように思います。

実習全体をふり返っての反省・気づき・今後の課題 記入日：令和3年9月30日

実習全体を振り返ると、未満員クラスに入。大とき月餅は、より出た。と、理解をよりこに備があることがわかりました。発達段階が1人ひとり違うので、1人ひとりをよく見ながらそれを元に合った援助や言葉掛けが大切ということを実感することができました。運動会練習で、踊りの練習をする前にどのような踊らたいのか子どもたちから聞いたり掛けをし、子どもに合わせた共感を感じながら大きく踊れよう、声掛けをしていくことがわかりました。1つひとつの動きを真似の取り組めるように、声のトーンを変えたりすることで子どもたちの気配や声のトーンを変えたりしていることを学ぶことができ、場面ごとで声のトーンを変えたりすることが大切だと感じました。子どもは保護者のやりとりが難しく、相手の身持ちや自分の身持ちが思うように伝わらないことを知り、保育者がお互いの身持ちを聞き安心して語りあう。保育者と子どもとの信頼関係が大切になってくることを学ぶことができませんでした。責任実習では、導入の部分は指導計画通りにできたと思います。製作の説明の部分が言葉と年の話し合いで説明をしても、子どもたちがわからず、大きく説明ができませんでした。製作で使う材料を使いながら説明をした。子どもたちがわかりやすく説明ができたと思いましたが、子どもは好きな色を選んでくれたり、月餅の色の中の色が落ちてしまったり、くちくちしてしまったり、反省会では子どもたちが好きな色を選んでくれたり、用意の色をクラス人数分用意することを先生がアドバイスを頂きました。楽しんで子どもたちが行うことが、必要な材料を準備することが大切だと思いました。声のトーンを大きく抑えたり、ときどき子どもに伝わらないところは声が出た方がいいかと思いました。

実習全体をふり返っての反省・気づき・今後の課題 記入日：令和3年9月15日

今回の実習では、保育実習1で学んだことや反省を思い出しながら、思い出すことが出来るよう取り組まれました。未満員クラスでは、保護者の声に耳を傾けたり子どもや、保護者の発達段階の様子を観察することで、決断の言葉も受け取る時期の子ども達に対して、真摯な言葉掛けで、行く、子ども達も自然に行動で、その気配を引かせるような言葉掛けをするこに大切だと実感しました。責任実習を4歳児クラスでさせて頂き、自分にとって新たな発見や学びがいくつかありました。直業した指導案をもとに活動を進めていく中で、時間配分や活動内容は子ども達に適切であつたと思われ、よく出来たと感じたので、想定より外の気温が上がり、後半では子ども達の集中力が落ちたのは、少し疲れてしまっている様子や、友達とのミスに対して感情的に振る子ども達の姿も見られ、再度集中力を高められるよう声掛けをするこに難しさを感じると共に、活動をしながら子ども達に意図的に行動やサポートをいとおこなうことが出来たと思えました。日々の生活の中では、食事や着替えをする際に様々な自分で行動でしているのに対して、それぞれの子どもの性格や特徴をうまく理解した上で、個々に適切な支援がどの声掛けを意識するこで、自ら行動するよう促すことができていきました。今回の実習で子ども達と関わるこで、最後の実習であるということもあり、毎日新たな発見や反省、自己課題を見出し、学ばせたい、実習するこで、できたと思えている。この度は実習と振り返り指導をして頂き、本当にありがとうございました。

また、最終ページの「実習全体をふり返っての反省・気づき・今後の課題」は、A4の日記1ページ

自分の22行なので、事前指導では3段か4段に分けて書くと読みやすいと伝えているのだが、こちらも段落に分けて記入する学生は数えるほどしかない。

⑫文末の表現がすべて「思います」や「です」などで、ワンパターンになっている。

⑬文章表現力ではないが、テキストがスラスラ読めない学生も少なくない。常用漢字すら完全に覚えていないことと、テキストを読むときにアクセントがおかしいため、他の意味に受け取られかねない読み方をする学生も目立ってきた。

「日本語の表現法」の授業は演習科目で、40名ほどのクラスに別れて行うため、授業の前半で多くの学生に共通した「(前年度の授業で提出された課題文の中からピックアップした)間違いやすい表現例」をプリントした手作りの資料で解説を加え、後半では学生が提出した作文から抽出した「間違った書き方の文章」を配付して学生に間違った表現の部分を見つけて訂正してもらっている。これは、「自分で考える習慣」を身につけてほしいからで、こうした方法をくり返すことによって、少しずつ主体的に学習しようという意識の芽生えが期待できると考えたからである。

また、学生には毎週自宅でも400字の課題文を書いて提出してもらっているが、筆者はそのすべてを必ず読んで「おかしな表現」の部分に赤ペンのチェックをつけて翌週の授業時に返却してきた。返却の際は「問題の部分をチェックするだけ」で、原則として訂正は行わない。その理由は、授業担当者が訂正してしまうと、学生は自分で正しい書き方を考えようとしなくなるからである。もちろん、正しい書き方の分からない学生もいるはずなので、「不明な点があればいつでも研究室にきてほしい」と伝えている(下線は筆者。以下同じ)。

さらに、学習意欲を高めるために、担当者が「合

格」と判断した課題文には提出者の名前の下の部分に「赤丸」をつけると説明し、「赤丸」の数が成績にも影響することを付け加えている。この方法には予想以上の反応があったので、前掲『紀要』19号に筆者は次のように書いておいた^(註5)。

第1回目の課題文を読むと、基本的な書き方の注意を説明しておいたにもかかわらず、予想していたとおりの間違い表現が数多く発見できた。このことから、一般論として指摘しても、自分のこととして意識しない学生が少なくないことが裏づけられた。

初めは原稿用紙がチェックで真っ赤になる学生もかなりいて、落ちこむ姿も見うけられたが、提出回数が増えるにつれてチェックされるころは確実に少なくなっていった。もちろん、よく書けている文章には○だけでなく、褒め言葉などを書き入れて激励したことは言うまでもない。

毎年のことであるが、この授業で私は学生と根比べをするつもりである。そのため、あまり思い詰めないようにして、時には学生と一緒に「娯字」を楽しんでもいる。

少し息抜きをするために、その時に紹介した「娯字」の一部を紹介しておこう。

- ①今日は風で悪感がする。
→正しくは風邪と悪寒です
- ②今日の天気は曇りです。
→曇り空は太陽（お日さま）が雲の上にあるのでしょ
- ③大学の講義を聞く。
→これでは授業中のおしゃべりが止まないのも当然でしょ
- ④二足三文で買う。
→二足でまとめ買いをしたのですかね
- ⑤下熱剤を使った。
→たしかに熱を下げることには違いないのですが……

本題に戻るが、学生の提出した課題文が担当者の基準で合格した場合に「赤丸」をつけて返却したところ予想以上の反響があったので、この方法はその後も継続した。裏話になるが、400字の課題文のチェックを毎週続けることは相当な負担になる（学生数は一定でないものの少ないときで150名、多いときには200名を超えることもあったので、課題文を読むための時間は週に10時間以上である）のだが、担当者が本気で学生に向きあうか否かによって学生の反応は確実に変化することが確認できた。参考までに半期の授業終了後に提出された「授業の振り返り」の中から5名の感想を記しておこう。

小学校の頃から作文は何度も書いてきましたが、今まで添削をしてもらったという経験はあまりありませんでした。そして、今回の授業で、どれほど自分が間違っていたかということがわかりました。

添削を受けてからは、直されたことなどから注意して書くようになり、意識の持ち方が変わったような気がします。

添削をしていただいた文章を見ると、書く回数を重ねるにつれて間違いが少なくなっていくのがわかりました。何度も書くことによって、文章に慣れることは大事だと思います。

今まで文章を書いて先生に提出しても、丸がついているだけだったりはんこが押してあるだけだったり、添削していただいたことはありません。そのため、間違いを正しいと思いこみ、そのままにしていました。でも、この授業で直すことができ、本当によかったと思います。

先生は、頑張っていこうという意欲を引き出してくださいました。先生は、よい文章が書けたら丸をつけてくださるからです。毎週一週間前に書いた作文が返されるとき、緊張します。今日は丸がついているといいな、という気持ちになり、見るのが楽しみです。まだ二つしか丸

をもらっていません。もっと文章力をつけて、いい文章が書けるように練習したいと思います。

授業を受けた学生のほとんどがこのよう感想を書いている。それらを読むと、どのように学生の作文指導をしたら学習意欲が高まって、文章を書く力が身につくかのヒントを学生が教えてくれるように感じる^(註6)。

大事なことは、学生が自分の文章力を正しく知った上で身につけるべき課題に気づけるようにすること、そして気づいた課題を克服するためにコツコツと努力する気持ちになるような動機づけをすることではないだろうか。文章力を高めるための授業は、指導者と学生の応答的な関わり方に重要な意味があると思われる。

4. 文章力の低下が意味する問題を考える

ただ、「はじめに」でもふれたように、その後も短大生の文章力は大きく低下し続けている。「大学全入時代」と言われる現在は、従来の大学生なら当然に身につけていた基礎的な学力がなくても入学できる大学が増えてきた。さらに、大学への入学が「勉強する」という目的でない学生も少なくないと言われる。

そうした状況の中で、筆者は2022年3月に退職するまで、短大（保育学科）で「日本語の表現法」（カリキュラムの変更などで科目名は変化した）、文章の書き方に関する授業という内容に変わりはなく、2018年に四年制大学（教育学部）が設置認可されてからは1年生の必修科目「日本語Ⅰ」の授業も担当してきたので、学生の文章力の変化を感じながら少しでも卒業後に困らないよう、取り組み方を工夫し続け、その経過を『紀要』や『育英教育論集』『全国保育士養成協議会研究大会』等で発表してきた。

本小論の内容に繋げるために、筆者の取り組みと学生の変化や実態等についてはそれらを参照し

ていただきたいので、重複する内容も多いが以下に記しておく。

- ① 「文章表現から見た保育科学生の問題点—表現の特徴と思考力の関係—」
（『紀要』第23号 2006年2月）
- ② 「保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について—〈日本語の表現法〉と〈保育者論〉の授業を通して—」
（『紀要』第30号 2013年3月）
- ③ 「保育者を目指す学生の文章力を高めるための取り組みについて—保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習日誌を比較して考える—」
（『紀要』第32号 2015年3月）
- ④ 「短大生の文章力低下と幼児期の保育（教育）について—〈やる気〉の形成と幼児期の主体的な遊びの意味を中心に—」
（『紀要』第36号 2019年3月）
- ⑤ 「短大生（大学生）の文章力に関する問題点を考える—短大生の経年変化ならびに四大大生とも比較して—」
（『紀要』第39号 2022年3月）

また、『育英教育論集』にも、

- ① 「保育実習指導として不可欠な言葉づかひの指導について—言葉づかひに無関心な学生の増加と対応を中心に—」
（第2号：2017年10月）
- ② 「日本語指導（話し方・書き方）から見えてくる学力面の問題点—保育者に求められる文章力（基礎学力）について—」
（第4号：2018年11月）
- ③ 「実習日誌の文章から見えてくる保育者としての問題点—注意力や集中力の欠如を中心に—」
（第4号：2018年11月）
- ④ 「保育科学生の記事力を直視した学習指導と生活指導のあり方」（第6号：2020年3月）

等が掲載されている。

このほかに、筆者は「全国保育士養成協議会」の研究大会において、2006年から2013年までの8回連続で、短大生の文章力低下と保育者の資質に関する口頭発表を行ってきた。第1回から第3回の発表では、それほど関心を引くことはなかったが、回数を重ねるうちに関心が徐々に高まってきた。もちろんこれは喜ばしいことではないのだが……。そして、それと同時に学生の文章力に関する筆者の『紀要』論文が引用されたり紹介されたりするようになり、これまでに30本ほどの論文で取り上げられている。

このことは、全国の四年制大学や短期大学で学生の文章力の低下が大きな問題になっていることの現れではないだろうか。しかも、このような状況は〈単なる文章力の低下では済まされない重要な問題を含んでいる〉ことに気づかなくてはならないのであるが、現状はまだそこまで至っていないと言わざるを得ない。

5. 文章力低下の背景に潜む注意力の欠如

この問題に関しては、上に掲げた拙稿「実習日誌の文章から見えてくる保育者としての問題点—注意力や集中力の欠如を中心に—」（『育英教育論集』第4号：2018年11月）のサブタイトルからも気づくと思うが、このような考え方はまだそれほど注目されていない。筆者は論文の概要で次のように指摘した。

保育者が担うべき役割は、乳幼児の安全を確保しながら生長や発達に必要な援助を行うことである。生長・発達途中の乳幼児は危険から身を守る術を身につけていないだけでなく、「何が危険であるか」も理解していない場合が少なくない。そのため、保育者は常に幼児を危険な状況から守る責任を果たさなくてはならないのである。つまり、保育者の資質としては、絶え

ず乳幼児の周囲に目を向けて的確に状況を判断し対応することが求められているのではないだろうか。

ところが、最近の学生を見ていると、「これで大丈夫だろうか」「何を考えて実習に取り組んでいるのだろうか」と不安になることが非常に多い。その一つが、注意力や集中力の欠如である。実際、実習評価票には以前よりも「目の前の子どもだけでなく、周囲に目を向けてほしい」という指摘が増えている^(註7)。

そして、筆者は『紀要』第40号（2023年3月）「園児の生命を守るために必要な文章力トレーニング—文章力低下から見えてきた問題点と対策について—」で、実習日誌に書かれた文章から「注意力が欠けている」と考えられる文章を紹介し、このままでは「保育者としての資質に重大な問題が生じかねない」と指摘して、次のように述べておいた。少し長いを紹介する。

そこで改めて学生が書いた実習日誌の文章に目を通して見ると、以前は文章の書き方の間違いを正すことを中心に指導していたのだが、「文章を書いている学生の注意力が欠如している」のではないかということに気がついた。

そのため、筆者は再度、実習日誌の「今日のふり返りと今後の課題」という13行の文章と、実習期間全体をふり返っての「実習期間全体をふり返っての反省・気付き・課題」という22行の文章を読み返した。それは、A4の実習日誌の半分ほどのスペースに、その日の活動の反省と翌日に向けての課題等を書く毎日のふり返りと、実習全体をふり返って書く文章である。

筆者が実習指導を担当していたときは、一日の「ふり返り」と「今後の課題」という二つのテーマを書くのであるから、実習指導の先生が読みやすいように段落を二つに分けて書くこと、そして実習期間全体をふり返っての感想は22

行で少し長い文章のため、「起・承・転・結」の四段落か、「序論・本論・結論」の三段落で書くように指示していたのだが、段落を分けていた学生は一割にも満たなかった。

それどころか、わずか13行と22行の短い文章であるにも関わらず、漢字や送り仮名の「ちぐはぐ」な書き方（一方は正しい書き方だが、他方は間違った書き方）をしている学生があまりにも多いことに呆れるほどであった。煩雑かもしれないが、実態を知っていただくために、その具体例を紹介しておこう（『紀要』第40号では31の表現を取り上げてある）。

- ①先生と話しました ↔ 保護者と話しました
- ②実習に望みました ↔ 実習に臨みました
- ③礼儀 ↔ 礼義
- ④向かえに来る ↔ 迎えに来ました
- ⑤子どもと接しました ↔ 子どもと接しました
- ⑥芽生える ↔ 目生える
- ⑦徐々に慣れました ↔ 徐々に慣れました
- ⑧事前に調べました ↔ 事前に調べました
- ⑨見づらい所でした ↔ 見づらい所でした
- ⑩近づきました ↔ 近づきました

実習日誌を読んでいると、このような「不注意とも言うべき書き方」が後から後から見つかるので、この辺で止めておくと、わずか13行と22行の文章中に、上述のようなちぐはぐな書き方が次々に発見できた。もちろん、一人の実習日誌に書かれているのは一例か二例なのだが、同じページに書かれている文章で、一方は正しく表記しているのに、もう一方（3か所の場合もある）の表記がなぜ異なっているのだろうか。まさに注意力が不足しているとか言いようがないように思える。

しかも、こうした書き方をほとんどしていない学生は一割にも達していない。これでは、園児の安全を守るために周囲に満遍なく目を向け

ることなど、とても期待できないのではないだろうか。子どもは、思いがけない行動をすることが少なくないのであるから、保育者には、常に子どもの行動に注意を向けてその行動を予測すると共に、とっさに対応する力が求められるのである^(註8)。

筆者はこのように述べた上で、

最近は「結果ばかりを求める」や「楽しいことばかりをしたがる」傾向が強まって、コツコツとくり返して学習することを嫌がる傾向が強いように感じられてならない。

これでは小学校以降の学習における質を高めることはできないと言わざるを得ない。そして、「いい加減な学習」が習慣として身についてしまうと、「子どもの〈いのち〉を護る」ことのできない保育者になってしまう恐れがあるのではないだろうか。

と結論づけたが^(註9)、それでは「子どもの〈いのち〉が護れる保育者」になるためにはどうしたらよいのだろうか。

筆者は、その鍵が子ども時代の遊び（生活）にあると考えている。もちろん保育者（親や大人）から「押しつけられた」遊びではない。そして、遊びの楽しさは「仲間と一緒に身体活動を伴うこと」に重要な意味があるのではないだろうか。主体的な遊びはとても楽しく、子どもを夢中にさせる。時間が過ぎるのも食事の時間も忘れて遊び続けるように、子どもの心を虜にするものである。しかも、子どもは好奇心が旺盛なため、「どうしたらもっと楽しく遊べるか」と、みんなで知恵を絞って工夫することもあるだろう。

こうした経験を何度もくり返すことが、遊びだけでなく、小学校入学以降の学習活動にもつながって、学習意欲を高めたり進んでお手伝いをするようになったりと、さまざまな活動に影響して

いくのではないだろうか。

6. 注意力や観察力を育む幼児期の「あそび」

そこで、この小論の最終章では概要の最後に述べておいた筆者（こども園の理事長として）の体験から二つの事例を紹介してみよう（文章は以前、公益社団法人・日本仏教保育協会の機関誌に掲載されたものの一部である）。

〈事例1〉「野菜の栽培と〈いのち〉教育」

1. ナスとキュウリの花

保育園の裏にある畑で、ナスやミニトマトが食べごろになっています。（中略）

収穫も楽しみですが、私にはもっと関心を寄せていることがあるのです。それは、ナスやキュウリの花が咲くと子どもたちの目が輝くからです。ナスの花は紫色で、キュウリの花は黄色です。ミニトマトも黄色ですが、ピーマンは白です。花が咲き始めると、子どもたちは色の違いにすぐ気がついて先生に報告にくるのです。

色だけでなく、花の形もそれぞれ異なっています。それだけでなく、花は茎の下の方からだんだんと上の方に咲いていくのです。一度に咲くわけではありません。

2. さまざまな葉っぱの色や形

花の色が異なっていることには、子どもたちもすぐに気がつくと思いますが、葉っぱはどれも緑色をしていますから、同じように見えます。けれども、ナスとキュウリでは葉っぱの形が違ってきますし、同じような緑色をしていても、比べてみると緑の濃さが微妙に違うことが分かるでしょう。

そして、じつはそのことに気づいている子どももいます。子どもの観察力の鋭さに驚かされることが少なくありません。もちろん、一人ひとりによって興味の対象は異なりますから、すべての子どもが気づかなくてもよいのです。

都市化が進んだ現代社会は、〈いのち〉の姿が見えにくくなったと言われます。けれども、野菜を育てることによって、〈いのち〉について大切なことが学べます。それは、〈いのち〉にはそれぞれの色や形があることです。そして、先生が教えなくても、子どもは野菜を育てながらそのことに気づいていきます。

3. 町中にある園でのとり組み

（省略）

4. ミニトマトを採らない子どもたち

毎年のことですが、収穫の時期が近づくと、子どもたちの目が輝き始めます。ミニトマトが少しずつ色づいてきた頃、年長組の子どもたちが「先生、いつ採るの」と聞いてきました。先生は、ほかのクラスの先生と相談して採る日を決めました。

子どもたちは毎日、カレンダーを見ながら「その日」を楽しみにしていたそうです。お帰りのとき、クラスのみんながくちぐちに「先生、あしただよね」と、うきうきしたようすでした。トマトを採る日、子どもたちはわくわくした表情で、畑に行きました。

ところが、「さあ採りましょう」と先生が言っても、だれひとり採ろうとしないのです。不思議に思った先生が「どうしたの」と聞いたところ、ひとりの子が「だって、かわいそうなもの」と答えたそうです。その言葉を聞いた先生の目には涙が浮かんでいました。毎日、お世話をしているうちに、子どもたちの心にやさしい気持ちが芽生えてきたのでしょう。

（『月刊仏教保育カリキュラム』2016年8月号）

〈事例2〉「楽しさや好奇心は学びの原動力—楽しいと子どもは夢中になる—」

1. 落ち葉のダンスを楽しむ

秋が深まってきました。桜はほとんどの葉が落ちてしまいましたから、空が広がったようです。爽やかな空気を吸って、年中組のお友だ

ちが園庭で元気に跳びはねています。じっと枝を見上げていた子どもの一人が「せんせい、落ち葉がダンスしてるんだよ」と言いました。

先生は、子どもの発想にビックリです。枝の先に残った葉が、ときどき落ちてくるのですが、クルクルと回転したりヒラヒラと舞ったりするようすが、ダンスをしているように見えたのでしょう。落ちてくるときの動きがおもしろいので、子どもたちは飽きずに眺めています。

どの子の表情も真剣そのものです。その理由は、葉が地面に落ちてからもいろいろな動きをしているからです。園庭の向こうの方に飛ばされていく葉もあれば、足もとに吹き寄せられる葉もあります。先生が子どものようすに気づいてから10分以上が経過しましたが、誰もその場を離れようとしませんでした。

2、緑色の葉っぱもあった

すべり台やブランコで遊んでいたお友だちも集まってきたので、先生はみんなをこども園の隣のお寺に連れて行きました。境内には、大きな木がたくさんあります。先生は、赤や黄色に変わった葉を見せようと思いました。お盆やお彼岸に本堂でお参りをしますから、境内は子どもにもおなじみで楽しそうです。

(中略)

本堂の裏には、真っ赤に色づいたイロハカエデがありました。山門前のイチヨウの葉は真っ黄色です。赤や黄色の鮮やかさに、子どもたちは目を奪われているようです。そして、地面に落ちている葉をひろい始めたとき、イロハカエデが手のような形で、イチヨウの葉が扇形をしていることに気づきました。

その時、「せんせい、緑の葉っぱがあるよ」という声が聞こえました。本堂の裏にある椿や山茶花の葉は濃い緑色ですし、松や杉などの針葉樹は秋になっても針のような葉が緑色のままです。「せんせい、秋になっても緑色の葉っぱがあるんだね」「どうして赤や黄色にならない

のかなあ」という声も聞こえます。

3、大切にしたい「不思議に思う心」

子どもは好奇心が旺盛です。身の回りのできごとや自然の変化にも、大人が考える以上に敏感に反応します。そして、ひとつのことに関心を持つと「あれはなんだろう」「どうしてだろう」といった疑問が次々に湧いてくるのです。けれども、先生は「どうして赤や黄色にならないの」という質問には答えませんでした。

それは、子どもに想像する時間を与えた方がよいと考えたからです。すると、先生の期待どおり、一人の女の子が「冬になると、赤や黄色いお洋服の方が温かいからだよ」と言いました。別の子は「いつも同じお洋服を着ていると飽きちゃうからだよ」と、つぶやいています。

それを見ていた先生は、給食までの時間に落ち葉のダンスを再現しようと考えました。教室に戻った子どもたちは、思い思いの葉を持った手を目の高さまで上げて、そっと手を離しました。すると、園庭とは違ったダンスを始めましたが、どの子も大喜びです。

(後略)

(『月刊仏教保育カリキュラム』2020年11月号)

近年は、多くの保護者が「早期教育」や「お勉強(知的教育)」に関心を寄せている。一方、少子化が進む中で園児を確保しなくてはならないため、保育現場でもそうした保護者の考えに同調する傾向が見られる。しかし、幼児期からの知的教育は本当に子どもの将来に有益なのだろうか。

筆者は、教育要領や保育指針に示されているように「子ども時代の(主体的な)遊び」こそが、子どもの人間性を育む基本だと考えている。そして忘れてならないのは「遊びは楽しい」ことである。そこで、園長(育英短期大学の卒業生で、筆者の父親が園長在任中から30年勤務している)や主幹保育教諭等と連携して仏教保育を実践している。仏教保育だからと言っても保育内容は「幼

保連携型認定こども園教育・保育要領」に基づいていることは言うまでもないが、年間に5回ほどの本堂でのお参りを取り入れ、遊びや身体的な体験や活動を大切にした保育を心掛けている。

本堂における年間の主な行事は、花まつり（お釈迦さまの誕生を祝って誕生仏に甘茶をかける）・成道会（お釈迦様が悟りを開いたことを祝う行事）・涅槃会（お釈迦さまの死を悼む行事）と、お盆やお彼岸のお参り等で、本堂には3歳以上児がお参りするが、珍しい姿の仏像や大きな太鼓・木魚・釣り鐘などに興味津々といった表情になる。あまり緊張しないように心掛けながらそれぞれの行事の意味を短い時間で説明していると、みんな姿勢を正して真剣に聞いてくれる。

筆者は緊張と楽しさのバランスが取れるように、行事を終えて帰るときに大きな太鼓か木魚か磬子の中で好きなものを鳴らしてもらっている^(註10)。子どもが一番人気はいつも大太鼓に決まっているが、3歳児も5歳児も、鳴らすときの表情は生き生きとしている。鳴らし終わると楽しそうにこども園に帰って行く。本堂の上がり口には50人くらいの園児の靴が並んでいるが、先生に言われなくてもきちんとそろえて脱いでいる。

この他にも、第6章の事例で紹介したように、野菜を育てたり、近くに借りた畑でサツマイモ掘りをしたりして〈いのち〉に触れあう楽しい体験ができるように工夫しているが、けじめをつけた行動ができるように注意はするものの、押しつけにならないように心掛けている。

その結果であろうか、卒園児が最も多く入学している小学校の校長先生から「他の園の卒園児に比べると、授業中に先生の話をととても静かに聞いていますね」というお褒めの言葉をいただくことがよくある（もちろん、筆者に対する言葉なので差し引いて聞く必要があると思うが）。そうした「体験の楽しさ」を小学校入学以降の授業への取り組み方につなげることが重要である。これからも、こども園時代の体験が小学校入学以降の学習

や日常生活にどのような影響を与えるのかについて考えていきたい。

【註】

(1) 拙稿「園児の生命を守るために必要な文章力トレーニング—文章力低下から見えてきた問題点と対策について—」（『育英短期大学研究紀要』第40号：2023年3月）を参照。その中で筆者は次のように問題点を指摘した（36ページ～37ページ）。

筆者が20年前に短大生の文章力の低下を問題にした頃と比べると、大学全入時代まっただ中における短大生の文章力の低下はすさまじいものになってしまったと言わざるを得ない状況である。誤字や送り仮名の間違いは言うに及ばず、主語と述語の繋がらない文章が頻繁に登場し、話し言葉と書き言葉が同居する状態で、取り留めもなく100字から200字も句点を打たずに続けられる文章も珍しくなくなった。

しかも、こうした状況は短大の学生だけでなく、授業を兼務していた四大学生の文章でも同様であった。具体的な事例は省略するが、筆者はこのような状況で「子どもの命が守れるだろうか」という不安が生じてきた。そのときに思い浮かんだことが、近年、保育現場での園児の事故が多発しているという現実である。

(2) こうした問題に関してはさまざまな指摘があるので、その一部を紹介しておこう。

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄『分数ができない大学生』（東洋経済新報社1999年）

溝上慎一『現代大学生論』（NHKブックス2004年）

高橋一夫「短期大学の現状と学生の実態—短期大学生の資質とその志向—」（『学生の学力と高等教育の質の保証Ⅰ』学文社2012年所収）

高橋一夫「短期大学生の学力実態とその支援方法—学生の言語表現の特徴から—」（『学生の学力と高等教育の質の保証Ⅱ』学文社2013年所収）

シリーズ大学2『大衆化する大学—学生の多様化をどうみるか—』（岩波書店2013年）

仲道雅輝・山下由美子・湯川治敏・小松川浩編『大学初年次における日本語教育の実践』（ナカニシヤ出版2018年）

喜入克『高校の現実』（草思社2007年）

朝比奈なを『高大接続の現実』（学事出版2010年）

朝比奈なを『見捨てられた高校生たち 知られざる「教育困難校」の現実』（学事出版2011年）

(3) この文章は昭和 63 年 3 月に前橋育英学園短期大学から創刊された『想林』第 3 集に掲載されたものである。『想林』創刊の目的については、創刊号の「編集者のあとがき」に編集を担当した玉井成光教授（教育学担当・前新潟大学教授）の言葉が記されている。

「三年前に、私どもの短大に、英語科が増設されたときから、多年の懸案であった「研究紀要」が発刊されることになった。そして本年三月に、第四号が刊行されている。これは、大学として誠に悦ばしいことである。併し、そこには、研究を困難ならしめるような事情が、全く無かったわけではない。それは、恐らくは、いずれの短大にも見られるようなマイナスの条件であったろう。つまり、研究者の数や資料や予算の乏しさ、などである。

私どもが考えたことは、研究が困難な状況にあるならば、研究という固い枠から外れて、もっと気楽に肩肘はらずに書けるようなものを考えては、ということであった。つまり、世の中で一般に「エッセイ」などと謂われているような内容のものであるならば、美術家でも音楽家でもスポーツマンでも、書こうと思えば書けるであろうし、研究論文ではない形で、仲間や学生に接することも可能なのではあるまいか、などと考えたわけである。（『想林』創刊号 前橋育英学園短期大学 昭和 61 年 3 月）

筆者は育英短大で「道徳教育（保育者としてのあり方を講義）」を担当することになった際に、授業で用いるテキストの必要性を痛感した。現在ならば「保育者論」に関する出版物を何種類も目にする事ができるが、当時は保育者のあり方に特化したテキストなどなかったからである。

幸いなことに筆者の実父が保育園長であり、長年にわたって県内保育団体の役員や「保育群馬」（毎月発行の機関紙）の編集を担当していたため、「保育現場で求めている保育者像」等についての情報に接する機会が少なくなかった。

そこで、それらの情報を集約して「すぐに役立つ実践的な内容」としてまとめたものが前掲の「本当に保育者になりたいと思う人への 18 章 — 基礎的人間学・覚え書き—」であり、応用編としてまとめたものが『想林』第 4 集に掲載の「本当に保育者になりたいと思う人への 18 集—実践的人間関係論—」（平成元年発行）で、そこでは、あいさつ（第 2 章）・あるきかた（第 3 章）・返事

（第 6 章）・メモをしながら話を聞く（第 7 章）・ことばづかい（第 9 章）・出勤は早めに（第 10 章）・遅刻と休暇（第 11 章）・電話のかけ方（第 12 章）・名刺（第 14 章）・退職のしかた（第 17 章）などを取り上げた。

(4) このことに関して、元大阪大学大学院助教授で MP 人間科学研究所代表の榎本博明は、自身の著書『教育現場は困ってる 薄っぺらな大人をつくる実学志向』（平凡社新書 2020 年 6 月）で次のように分析している。

ポジティブ心理学の第一人者であるチクセントミハイが唱えるフロー体験というものがある。勉強や仕事、趣味などにおいて、「楽しい」ということの意味を考える際の参考になる。遊びの性格を持つ何かをしているときこそ、人はワクワクしながら楽しめ、その活動に没頭できる。ただし、そこでは自分の能力を最高度を使って何かに挑戦していることが条件になる。そのとき集中力が高まり、傲慢さはなくなり、時間を忘れ、自意識も消滅し、そのこと自体に深く没頭する。そのような状態のことをフローと呼ぶ。（中略）チクセントミハイは、受動的な娯楽と能動的な娯楽を区別している。（中略）能動的な娯楽というのは、スポーツや芸術、趣味、学びなどの活動に没頭することを指す。そのような娯楽の場合、安易に楽しむことはできない。いきなりうまくできるようなにはならない。簡単には習熟できない。楽しむためにはそれ相応の努力が求められる。だからこそ、一定の水準に到達し、楽しめるようになったときの喜びは、何ものにも代え難いものがある。

と述べて、

このところの「楽しい授業」を目指す動きにおいては、「楽をして学ぶ」という方向に傾きすぎているように感じる。

と指摘し、その上で、

学ぶ喜びを味わえる心を持つチャンス子どもたちに与えるには、「楽をして学ぶ」という方向でなく、「学ぶことが楽しい」という方向を目指すべきであろう。そのためには、基礎的な知識の習得が欠かせない。それによって、はじめて「わかる」を「楽しい」につなげていくことができるのだ。

と、「学ぶことが楽しい」と感じられるように指導することの重要性に言及している。

筆者が毎週の作文提出を続けたのも、くり返し書くことによって「自分でもその気になれば書ける」こ

とに気づいてほしいからである。そのために、筆者は学生の書いた文章をすべて読んだ上で返却することを実行してきた。榎本は続いて、

勉強でも、スポーツでも、芸術でも、仕事でも、何でもそうだが、ある程度できるようになって「楽しい」と感じられるようになるには、単調な訓練や辛い練習を繰り返すことで基本を習得し、基礎的な能力を身につける必要がある。そのため大切なのが非認知能力である。

2000年にノーベル賞を受賞した経済学者ジェームズ・ヘックマンは、人生のどの時点において、教育に金をかけるのが効果的であるかを探る研究を行っている。そして、小学校に入る前の教育がその後の人生を大きく左右することを実証してみせた。しかも、就学前教育でとくに重要なものは、IQのような認知能力、いわゆる知的な能力を高めることよりも、忍耐力や感情コントロール力、共感性、やる気などの非認知能力を高めることだということを見出した。

と、重要な指摘をしている(アンダーラインは筆者)。

- (5) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」(『育英短期大学研究紀要』第19号 2002年2月) 77ページ
- (6) ただし、ときにはこの方法に対する「不平」や「不満」を書いてくる学生もいた。具体的には、「アルバイトが忙しいのに面倒な課題を提出させられるのは迷惑だ」「なんで、こんな課題を出さなくてはな

らないのかわからない」という類であるが、不平や不満を言う学生の文章の中に間違った漢字や表現が見られるのであるから余りにも身勝手な言い分ではないだろうか。そのため、筆者はそうした「意見」が見られたクラスでは、より丁寧に文章力の必要性を説明した。

- (7) 拙稿「実習日誌の文章から見えてくる保育者としての問題点」(64ページ) 第4章③参照
- (8) 拙稿・註1論文「園児の生命を守るために必要な文章力トレーニング」(37ページ~38ページ) 参照
- (9) 拙稿・註8論文 39ページ
- (10) 筆者がこのような方法を考えたのは、35年ほど前の学生に卒園した園での楽しい思い出を調査した際に、キリスト教の園を卒園した学生は「クリスマス」や「ハロウィン」などの記述がたくさんあったのに対し、仏教園を卒園した学生は「楽しい思い出はなにもない」と答えていたからである。(拙稿「保育科学生の宗教的背景—仏教保育はいやだについて—」(『教化研修』31 駒沢大学・曹洞宗教化研修所 1988年3月)
- 拙稿「保育科学生の宗教意識—実習と就職をめぐって—」(『宗教学論集』第14輯 駒沢大学宗教学研究会 1988年3月)

(2024年1月15日受理)

